



鼓童文化財団研修所第31期生が入所しました。

ドキドキ・ドーン・ドトーツ(怒濤)の2週間。

四月三日、研修所に新しいメンバーが加わった。新一年生の十八〜二十四歳、男性ばかりの八名である。二年生も後輩を迎える新生活への期待に顔がほころんで、見ているこちらも嬉しくなる。

さて、新一年生の二週間。基本生活の慣らし期間がある訳ではなく、もう初日からありとあらゆる初めての体験が訪れる。オリエンテーションもそこそこに、まずは祭り見学。続いて、種初用の稲の脱穀体験。種初を選び、種を蒔く。田植えが遅れないようにこの作業は来た早々にとりかかる。残った藁は叩いて、後に藁ぞうり作りを習う。そう、研修所では太鼓を叩く前に藁を叩くのが恒例だ。

次は、一本の竹を伐り出して一、二年全員で箸作り。その後、ようやく鉦の歯の研ぎを習って、角材から自分のバチを削る。はたまた、機関誌の発送作業、茶道で使う帛紗の手縫い。柿野浦の祭りでは集落の鬼太鼓衆をもてなす料理作りは一年生に任される。その合間によろやく、太鼓・唄・笛・踊りの稽古が始まる。溢れないように、自分の身体に留めてくれよ。人間味豊かな魅力ある男性になって太鼓の音を響かせてくれよ。今はその為の土台作りだからね…と願いつつ見守る四月の私達である。(報告：千田倫子)

写真右：初日のオリエンテーション。二年生が、同部屋で面倒をみる後輩が決まり、よろしく！と握手。「頼もしい先輩になれるか、少し不安。でも全力で一年生に伝えていきたい。」
写真左上から：四月三日、入所の日。柿野浦バス停に降り立つ。／これから苦楽を共にする相棒となるバチを作る。／初めて太鼓を叩く日。二年生は去年の自分を思い出し初心に帰る日。／四月十五日、柿野浦の鬼太鼓。二年生の晴れがましい鬼の姿に、来年の自分を重ねる。

写真：石原泰彦、西田太郎、洲崎純子